

徒然なるままに…50

－ 子どもの心と学びを支援する生徒指導とは －



平成28年9月30日
白鳥小学校 研修部

はじめに

少し、ほとぼりが冷めつつありますが、広島カープが25年ぶりの優勝を果たしました。私が子どもの頃は、カープが本当に強い時期で、その姿を身近に見ていた分、その後の衰退ぶりが信じられなくて…。でも、今年は、やってくれました。まさに、広島の人たちにとって、悲願の優勝です。

今回の優勝の立役者は、(緒方監督ではなく)何ととっても、黒田博樹、新井貴浩両選手でしょう。優勝の瞬間、二人が抱き合う姿に、涙が出ました。二人は、持病や年齢など、大きな課題を持ちながらも、自分を奮い立たせ、優勝を勝ち取ろうとする闘士とたゆまない努力を、身を持って示しました。そんなリーダーシップがチーム全体の結束力を生み、粘り強く勝利を勝ち取るチームへと束ねたのでしょう。私たち教師も、こうありたいものだ、つくづく感じています。

さて、先日、広島大学大学院 岡 直樹先生の「学習面の問題に対する生徒指導・教育相談の考え方と進め方」と題した講話を聞きました。学習と生徒指導とのつながり、「分かる」、「できる」授業づくりについて、大いに示唆を受けましたので、少しお話ししたいと思います。ご迷惑でなければ、お付き合いください。

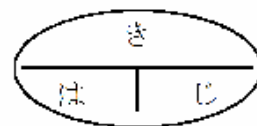
1 なぜ、子どもの学習に関する支援が必要か？

生徒指導・教育相談といえ、とかく、問題行動やいじめ、不登校など、子どもの心や人間関係における問題として取り組まれます。しかし、それらの問題は、学習面での課題が起因することも少なくありません。また、生徒指導・教育相談には、問題状況への対応ではなく、子どもを人として育てることに、その目的があります。したがって、学校生活における様々な問題状況の解決を目指して、「なぜ、分からないのか。やる気が出ないのか。」といった、学習における課題への支援に取り組んでいく必要があると考えられています。

2 我が国の子どもの学習に関する課題とその原因

全国学力・学習状況調査の質問紙調査において、「算数が分かる。」という質問に対して、過去3年間、20%程度の児童が否定的な回答しています。PISAの調査(2012)においては、数学に関する興味や自己効力感の度合いがOECD諸国の平均を下回っています。

この結果から、基礎的な学力は、少しずつ向上している一方、学習に対する興味や「できる。」「もっとしてみよう。」という自己効力感が低いという課題が挙げられます。この原因を、岡先生



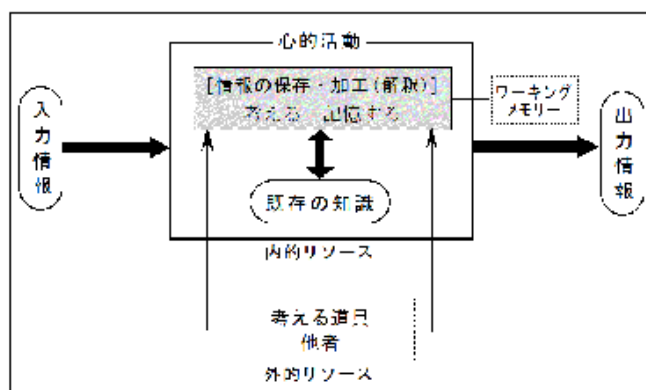
[資料1]

は、「結果主義・暗記主義的な学習観」にあると指摘されています。例えば、6学年算数「速さ」の学習において、[資料1]のような公式らしきものを見たり、使ったりされたことはありませんか。これ自体、速さと時間・道のりの関係を示すものではありません。

せん。正解を出すことだけを求めて、これに当てはめることによって、機械的な処理の仕方のみを「覚える」学習になるのです。当然、意味のないものですから、丸暗記するしかありませんし、これを忘れてしまったら、一卷の終わりです。その上、それらの関係や仕組みを理解することを求めるわけではないので、分かる喜びや他の内容への応用など、学習が広がる余地がなくなるわけです。

3 「覚える」学習から「分かる」学習へ

岡先生は、「分かる」ことを、ものの意味を見出すこと、持たせることと定義されています。これを、[資料2]のように、認知の構造として述べてみると、頭に入ってきた情報を、既存の知識や経験を使って、どういうことなのか、どんな意味を持っているかを解釈し、それを表現するという一連の流れの中で、新たなことが「分かる」のです。言い換えれば、新た

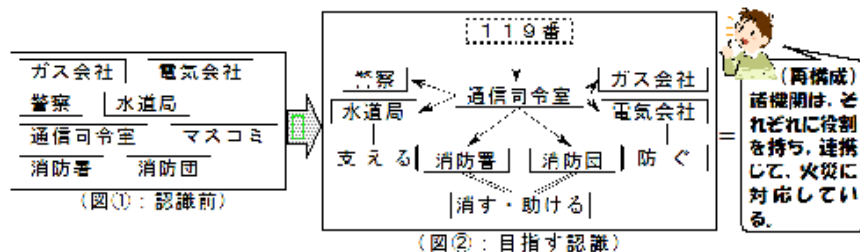


[資料2：認知のモデル(市川伸一(2002)より)]

な知識や概念が「分かる」ためには、自らの手で、事実や情報をつなぎ、新しい知識として構造化すること、これまで持っている知識や概念と関連付けて、その意味を考えることが必要です。

とすると、「分かる」ことを保証する授業とは、知識や概念を関係・構造としてとらえ、構造化された

ものを解釈・説明(再構成)する学習となるでしょう。いつも例示する3学年「安全にくらしを守る」では、それぞれの諸



[資料3：3学年単元「安全にくらしを守る」の構造化と思考・認識]

機関を関係付ける活動を通して、関係諸機関の働きを[資料3]の(図②)のように認識できるようにし、関係諸機関が連携して火災に対応していることを再構成する学習となるでしょう。

4 学習者としての自立を目指す支援とは

(1) 「やる気」を引き出す

学ぶことは、生活の土台となる生徒指導的な観点からも、生涯続けていく必要のある営みです。しかし、学校教育において、教師がずっと支援することができません。したがって、自立した学習者に育てる必要があると考えられます。

その弊害となるのが、子どもの「学習性無力感」と呼ばれるものです。「できない。」「分からない。」の経験を繰り返すうちに、その原因を自分の能力にあると考えるようになり、次も「できない」、「分からない」だろうと感じて、やる気が出ない状態をい

います。やる気を引き出すためには、逆に、「分かる」・「できる」経験を繰り返し、学習させればよいと考えられます。

しかし、「分かる」を目指すには、時間がかかります。[資料2]の「内的リソース」における既存の知識量が子どもによって少ない場合があるからです。したがって、まずは、「できる」経験を学習することから取り組みます。

まず、できる目標を設定します。これは、本人と相談し、指導者が想定する目標ラインと本人が「できそう。」と感じる目標ラインをすり合わせます。「するのが当たり前。」「他の子だってしている。」などと、できない目標を一方的に設定してしまえば、また、「分かる」・「できる」経験を学習することにはなりません。ここでは、本人に「できる」経験をさせることを目指す必要があるのです。

支援しながら、目標が達成できたら、次に、「なぜ、できたのか。」と問い、できた原因を振り返ります。それは、他の条件ではなく、自分の能力と努力でできたと思えるようにすることによって、「どうせできないだろう。」という無力感を克服し、自信につなげたいからです。これとともに、できていくプロセスや姿を具体的に示したり、「できた。」と言える成果・証拠を示したりして、プロセスと結果を関連させて、具体的に誉めることが必要だと考えられます。的確な誉めが本当のやる気になるのです。

このプロセスで取り組むことを繰り返すことによって、「できる」、「次もできそうだ。」というように、「やる気」を学習することになるのです。

(2) その子の「難しさ」をつかむ

学習に困難を感じている子どもに対して支援をするためには、まず、教師は、その子が持ち、感じている「難しさ」をつかむ必要があります。その際、とる手法として、「共感」と「傾聴」が挙げられます。その子の学習がうまくいかない悩みを「共感」し、子どもの立場になって、学習上の誤解、つまり、課題・問題点を見出し（「傾聴」）、どうしたらできるようになるかと、子どもと協働的に問題解決するので

これは、教師側の都合や願いだけで、一方的に目標設定したり、課題を与えたりという指示的・指導的なものではなく、子どもの思いに寄り添いながら、共感的にその子が「できる」ようにすることが必要なことを示しています。

生活習慣・態度に課題がある場合は、基本的な学習習慣、ベースになる生活習慣を定着させることから始めることになるでしょう。本人と相談・交渉をしながら、その子が「できる。」「したい。」と感じる学習の内容、量、時間、方法を決定すること、その子がして欲しいと感じる、教師や保護者のサポートをリサーチしたり、こちらから提案したりして、支援する体制をつくることの二つを進めていくことになります。キャラクターを使ったり、活動や評価の仕方を工夫したりして、その子の興味や特性を生かすことも考えられるでしょう。このようにして、学習が成立する条件を整え、その子が「できる」経験を学習することによって、やる気を起こし、学習習慣を定着することを目指すのです。

認識や認知特性に課題がある場合は、その子の考え方を見とったり、聞きとったりして、その子の特性や課題をつかむことから始めることになるでしょう。

何かを暗記するとき、声を出す方がいい人（視覚偏重）、聞く方がいい人（聴覚偏重）、書く方がいい人（動作）がいるように、人の認知の仕方には、特性があります。認知特性と学習の仕方が整合していないと、当然、学習面に「難しさ」を感じることになるで

しょう。とすれば、その特性に合わせた学習の仕方・活動を取り入れればよいでしょう。

学習過程において、学習内容の理解が不十分であったり、考え方の理解につまずきがあったり、処理の仕方に課題があったりすると、「分からない。」「できない。」が生じることとなります。この場合は、その子の間違いやつまずきを修正すればよいでしょう。

具体的に、二つの支援が挙げられます。

一つ目は、どこを、どのように間違えているのか、それは、なぜなのかを振り返ることによって、間違いやつまずきに、自ら気付くようにすることです。そのためには、ノートやテストの間違いを消さないようにします。

二つ目は、スモールステップで活動が進められるようにすることです。例えば、算数の学習では、式から一気に答えを導くのではなく、途中の計算を書くようにしたり、文章題の状況や事柄の関係などを図示させたりすることです。これによって、頭の中の作業を減らし、ワーキングメモリーの容量を多くするのです。

学習者としての自立を目指す支援とは、その子に合った目標や内容を設定し、「分かる」、「できる」学習の仕方を見つけることによって、家庭・学校での学習習慣と学習する手立てを定着させることだと言えるでしょう。

おわりに

また、例によって、少し長くなってしまいました。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

私は、特にこの数年でも、学習意欲、学習生活の問題状況と学習習慣にかかわっている活動での姿も、仲間や大人とのかかわりも、問題行動も改善していきます。そして、自己肯定感と次へのやる気が高まります。ひいては、子どもの頑張っている姿を見て、保護者の子どもの対するかかわり方も変わることがあります。

「授業では、子どもを育てられない。」と豪語する方の話を聞いたことがあります。ですが、私たち教師は、むしろ、授業でこそ、子どもを育てることができるのではないのでしょうか。質の高い授業を提供することによって、子どもは、ものの意味や価値や、仲間とのかかわりを学び、学ぶ喜びと伸びる自分への肯定感を高めていくことができるのではないのでしょうか。

どの子どもできるようにしたいし、様々なことに挑戦することのできるチャンスを持っています。それらを大切に、生かすことのできる教師でありたいと思います。

【参考文献】

- 市川伸一編著『認知カウンセリングから見た学習の相談と指導』ブレーン出版、1998。
- 市川伸一『勉強法が変わる本ー心理学からのアドバイザー』岩波書店、2000。
- 岡直樹 他『学習心理学ー理論と実践の統合を目指してー』培風館、2011。